Spitz nevus

Pigmented Spitz nevus と診断した 1 例

横山 泉^{*1} 遠藤祐理子^{*1} 堺 則康^{*1}
伊東 文行^{*1} 岩崎 隆^{*2}

Summary

A case of pigmented Spitz nevus in a 12-year-old boy is reported. Approximately 3 years previously he noticed a small pigmentation on the right dorsum pedis, and gradually increased in size and elevated.

Physical examination revealed a 13×10mm, dome-shaped, black nodule with irregular margin.

An excisional biopsy specimen was histologically diagnosed as nodular malignant melanoma at that time. A wide excision with skin grafting and right inguinal lymph node dissection were performed.

Recently, we checked clinically and histologically again and requested a fluorescence microscopy of formalin-fixed paraffin-embedded unstained specimen and a DNA distribution histogram.

We put the various reports together and finally made the established diagnosis as pigmented Spitz nevus.

Occasionally, a differentiation of a pigmented Spitz nevus from a malignant melanoma is very difficult.

So, we need more information such as a fluorescent finding and a distribution histogram to avoid a misdiagnosis.

緒 言

小児の悪性黒色腫は稀であるが、時として Spitz nevus との鑑別が困難な場合がある。

我々は、初めは悪性黒色腫と診断したが、パラフィン包埋未染色標本の蛍光観察や、細胞核

DNA 量の分布ヒストグラム測定結果を含めて再検討し、最終的に pigmented Spitz nevus と診断した 1 例を経験したので報告する。

症 例

患 者：12歳，男児

初 診：1993年 9 月22日

主 訴：右足背の黒色腫瘍

家族歴：特記すべきことはない。

既往歴：特記すべきことはない。

現病歴：約 3 年前から右足背の黒色斑に気づ

^{*1} Izumi YOKOYAMA, Yuriko ENDOH, Noriyasu SAKAI, Fumiyuki ITOH：日本医科大学付属第 2 病院皮膚科

^{*2} Takashi IWASAKI：川崎市，皮膚科

図 1. 初診時臨床像

図 2. 初診時臨床像

図 3. 病理組織像 (HE 染色)

図 4. 病理組織像 (HE 染色)

いていた。放置していたところ徐々に増大、隆起し、サッカーボールを蹴る時などに痛みを感じるようになったため、近医を受診し当科へ紹介された。

現 症：右足背内側に13×10mm大の黒色腫瘍が認められる(図1)。腫瘍は辺縁がやや不整、表面には軽度の鱗屑を伴い、中央はドーム状に隆起している(図2)。所属リンパ節は触知しなかった。悪性黒色腫を疑い excisional biopsy を施行した。

図 5. 病理組織像 (HE 染色)

病理組織学的所見：表皮の不規則な肥厚と著しい角質増殖を伴い、表皮内および表皮真皮境界部から真皮の上中層にかけて腫瘍細胞が不規則に浸潤して認められ、角質内および腫瘍細胞には多量のメラニン色素もみられる(図3)。腫瘍細胞は表皮内や表皮真皮境界部では大小の胞巣を形成し、一部は個別性に表皮上層にまで増

殖して認められる。胞巣を形成する腫瘍細胞と周囲の表皮細胞との裂隙は明瞭ではなく、また真皮では腫瘍細胞に混ざり比較的密なリンパ球浸潤もみられたが、Kamino body は認められなかった(図4)。腫瘍細胞は著しい大小不同などの異型性が強いが、少数の多核巨細胞も認められた(図5)。

図6. 病理組織像 (抗HMB-45抗体による酵素抗体法所見)

抗 HMB-45抗体を用いた酵素抗体法で腫瘍細胞は全体に弱陽性に染色されているが、真皮腫瘍細胞下部では染色されていないところもみられた (図6)。

以上より悪性黒色腫と診断し、拡大手術を施行した。尿中5-SCD 値も一時 $193\mu\text{g/day}$ の境界値を示したが、その後正常値に戻っている。また、術後現在までに再発は認められない。

その後、症例を再検討したところ、診断に疑問が生じたため、さらに詳細な検査を依頼した。ホルマリン固定パラフィン包埋未染色標本の蛍

図7. 蛍光顕微鏡所見 (未染色標本)

光顕微鏡的観察¹⁾では、腫瘍細胞に比較的強い黄緑色の特異蛍光が観察された (図7)。また、cytofluorometry を用いて測定した腫瘍細胞の平均核 DNA 量は $2.62C$ で、DNA 分布ヒストグラムでは、山崎の分類²⁾³⁾によるとパターンIIを示した。 $2C$, $4C$ 付近に幅の広い小さなピークが認められ、diploidに近いパターンとしてとらえられる (図8)。

再検討した組織所見も含めて以上を総合的に判断し、最終的に pigmented Spitz nevus と確定診断した。

図8. 腫瘍細胞の平均核 DNA 量および DNA 分布ヒストグラム

考 案

悪性黒色腫と Spitz nevus の鑑別は、臨床的にも組織学的にも困難なことがあるといわれている。自験例では当初、悪性黒色腫と診断したように pigmented Spitz nevus との鑑別に難渋した。臨床的には大きさが13×10mm と 1 cm を越える黒色腫瘍であり、辺縁がやや不整であることなどは悪性黒色腫を示唆する所見である。組織学的には、腫瘍細胞の異型性が強く、一部ではあるが個別性に表皮上層への増殖がみられることや、胞巣の大きさが様々で不規則なことなどは悪性黒色腫を疑わせる。さらに、ホルマリン固定パラフィン包埋未染色標本の蛍光顕微鏡的観察では表皮、真皮境界部の腫瘍細胞に比較的強い黄緑色の特異蛍光が観察され、悪性黒色腫が示唆された。一方、年齢が12歳と若いこと、臨床的には潰瘍、色調の濃淡やはっきりとした染みだしがみられないこと、組織学的に角層、顆粒層や表皮の肥厚があり、腫瘍辺縁での不規則な個別性の腫瘍細胞の増殖がないこと、抗HMB-45抗体を用いた酵素抗体法で腫瘍細胞は弱陽性で真皮の腫瘍細胞下部では染色されない部分があったことなどは悪性黒色腫を否定し、pigmented Spitz nevus が強く示唆され

た。さらに、細胞核 DNA 量や DNA 分布ヒストグラムでは良性に近いパターンを示した。

以上より総合的に判断し、自験例を最終的に pigmented Spitz nevus と診断した。今回、改めて蛍光法や細胞核 DNA 量の測定や DNA 分布ヒストグラムなどの重要性を再認識するとともに、診断に迷ったり、疑わしい場合は、より多くの情報を集める必要があると考えた。

謝 辞

最後に本症例についての御教示と蛍光法、細胞核 DNA 量測定などを施行して下さいました日本大学皮膚科の森嶋教授、藤田先生、湧井先生に深謝いたします。

文 献

- 1) 藤田日出雄, 森嶋隆文: ホルマリン固定パラフィン包埋未染色標本の蛍光顕微鏡的観察による悪性黒色腫の診断. 皮膚, 37(2): 239-251, 1995.
- 2) 山崎直也, 佐々木英也, 早坂健一, 他: 悪性黒色腫の予後因子としての核 DNA 量の検討. 日皮会誌, 99: 1394-1395, 1989.
- 3) 山崎直也, 石原和之, 中島孝: 悪性黒色腫の細胞核 DNA 量の測定による予後判定—平均核 DNA 量およびヒストグラム解析—. 皮膚科 MOOK, No.18, 金原出版, 東京, 1992, pp.139-145.